

第2話 モロッコの見どころあれこれ

モロッコは日本人の目からすると、見る物全てが物珍しく蠱惑的だ。

人は優しく、食べ物も美味しい。日本での慌ただし日常生活を一時忘れさせてくれる癒しの地でもある。千年も続く古都、活気あふれる近代都市、メディーナ（旧市街）のざわめき、古代ローマ遺跡、幽玄なサハラ砂漠、日干し煉瓦のカスバ、赤茶けた大地に緑が眩しいオアシス、アトラス山脈に降る雪、思わず手に取ってみたいくなる民芸品や骨董品の数々、モスクや天を衝くミナレット、人々の穏やかな笑顔などあげつらうと際限なく思い浮かんでくる。モロッコとは旅情を大いに掻き立てられる国である。

モロッコはアフリカ大陸初の新幹線を走らせ、高速道路や国際空港の整備を進めていて、旅行者の利便性は日ごとに向上している。

新しいホテルの建設や古い邸宅を改造したりヤドと呼ばれる超高級な宿など、予算に応じた宿泊設備が次々誕生している。

訪れる人にとって“安全”は何より関心の高い事項である。これまでモロッコを何度か訪れているが怖いか不安を感じたことは一度もない。それ故かモロッコ観光は若い女性の人気が高いと言われている。余談であるが、ある席で羽田孜元首相の隣に座った。羽田さんからモロッコのどこへ行ったのかと尋ねられ「カサブランカ」と答えた。するとカサブランカは東京と変わらないではないかフェズをぜひ見なさい。あそここそモロッコだよといわれた。後日訪れそのとおりであった。

モロッコをさ迷い歩くとと思わぬ感動にしばしば出くわす。外人部隊が通った切り立った山肌を縫うように連なる急峻な山岳道路、素朴な村々やカスバ、トドラ溪谷の目もくらむ絶壁、ワジと呼ばれる普段は乾いた川、迷路のような町、真っ白な街、青く染められた町、日干し煉瓦の城壁・・・人はいつしか異次元の世界を彷徨しているような不思議な感覚

となる。近代都市ワルザザードからバスに乗り、途中で四輪駆動の車に乗り換え荒れ地に点在するオアシスを眺めながら大砂丘の連なるサハラ砂漠に至った。目にするサハラ砂漠を単なる砂の連なりと考



サハラ砂漠への入り口

てはならない。サハラ砂漠は日本には想像不可の果てのない赤い砂の連なりである。

日本では白砂清松などというがサハラの砂は赤い。日の出を見るため真夜中に宿を出発しラクダの背に揺られた。ふと空を見上げると満



赤く染まる砂丘

天の星である。星空に押しつぶされそうな錯覚を覚えた。砂粒は限りなく細かいパウダー状で砂に音が吸い込まれるのであろうか、あまりの静寂にひどく孤独を感じたものである。太陽が顔を出した瞬間、地の果てまで砂原は真っ赤に染まる。

サハラ砂漠への玄関口はワルザザートであるが、そこはカスバ街道や世界的に有名な映画スタジオの基地でもある。俳優が滞在する立派なホテルもある。ワルザザートの街は、もともとはフランス軍の基地として築かれた街である。

モロッコ随一の大都市はカサブランカである。商業都市として栄え、今や450万人もの人が集中する大都会である。



ハッサン二世モスク

余談であるが同市は映画「カサブランカ」で一躍有名になったが、意外なことに撮影は全てアメリカのスタジオでなされ、モロッコで撮影されたわけではない。映画を見て郷愁を抱くファンに応えるため、かつてアメリカの外交官であった女性が、物語の舞台となった「リックスバー」をカサブランカ市内に作った。主たる客はアメリカ人と日本人だと聞いたが映画に郷愁を覚える人たちで繁盛している。

以前都内のデパートで“モロッコフェア”が開催されたことがあるが、その一角にリックスバーが設営されモロッコ駐日大使ともども喉を潤したものである。

モロッコへの海上からの玄関口タンジェは、歴史的な街だが今や大港湾施設や新幹線を通すなど、大変身を遂げつつある。メディナ

(旧市街)は時間があればぜひ覗きたい。

首都ラバトは王宮があつて落ち着いたたたずまいを見せる政治中心の都市だ。城壁に囲まれた旧市街の通りは小さな商店が入り乱れ騒がしい。

民家のドアは日本のようにインターホーンではなく、魔よけのファティマの手形が取り付けられていたのが印象に残る。

メクネスも古都として有名である。メクネスでの必見は北アフリカでもっとも美しいと言われているマンスール門である。美しいタイルで飾られた大きな門である。

メクネスの近郷には紀元2、3世紀ごろに栄えた古代ローマ遺跡ヴォルビリスや霊廟の町ムーレイ・イドリスがある。イドリスは故国の勢力争いに敗れ、ベルベル人の支援のもとモロッコで初めてのイスラムの王朝イドリス朝を興した人物で、人々からムーレイ(聖者)として崇められ霊廟の町が出来た。異教徒は霊廟には入れない。

アル・ジャディーダは海辺の街で16世紀オランダの拠点であった。当時の頑丈そうな城壁や地下貯水

場などが残るが現在はヨーロッパからの保養地として賑わっている。

モロッコで最も印象深い街はフェズであろう。フェズは旧市街と新市街に分かれる



フェズの旧市街は迷路

旧市街は紀元9世紀にできた街で、世界に類のない迷路の街である。案内人なしでは到底歩けるものではない。通りは極端に狭く車は一切通ることができず、物品を運搬するのはロバである。所によって道幅は人の肩幅しかない。あまり適切な例えではないが築地の魚河岸の狭い通りが無秩序に不規則に際限なくあると思えばいいだろうか。

フェズの狭い建て込んだ街中に800ものモスクがあるという。旅行者がフェズに案内されると必ず連れていかれる箇所が2つある。モロッコは職人の多いところであるが、フェズ

は陶器やタイル作りが盛んで、大勢の職人が感と手先だけで見事な製品を産み出していく。職人の手



陶器即売所



皮を染めるタンネリ

作業を眺めているとつい時間が過ぎていくのを忘れてしまう。

もう一つはタンネリと呼ぶなめし皮の色付けを行っているエリアである。付近はひどい匂いで、案内人から香りの強いミントの小束を手渡される。鼻の下にミントを持っていくと皮の臭さが和らぐ。タンネリは人がすっぽり入るほど大きなカメが沢山並んでいて壮観である。カメには皮を染める染料が入っているが、人もカメの中に浸り皮と格闘している。大変な作業である。

ここは着る物、バック・履物、スツール、帽子等膨大な数の革製品が展示してあり即売している。友人が見事な皮コートを買った。言い値は10万円であったが20分間の粘りの交渉で3万円を手を打った。バブーシュ（革製のスリッパ）は日本のデパートで一足5千円～7千円の物が、ネゴ次第で1500円程度にまでなる。500円の安物も店先に並ぶが、これは中国製だと売り子が馬鹿にしてそっぽを向いた。それなら並べなければいいのと思うのだが。

新市街は13世紀ごろにできた地区で、広大な王宮や傍にはユダヤ人街もある。通りの家の屋根にはコウノトリが沢山巣を作っていてカメラの標的となっていた。

もう一つ魅力的な都市を挙げるならマラケシュだろう。街のシンボルはクトゥビアと呼ばれる千年前に建てられた77mのミナレットである。

マラケシュはフェズに次いで古い街でかつては王都であった。街の中心は夜も昼もエネルギーが溢れかえるカオス状態のジャマ・エル・フナ広場である。

興奮のつぼとでもいえる広場は、人人で溢れかえり様々な食べ物の屋台が並び、夜には大道芸人がそこここで技を披露し、取り囲む観客の喝采を浴びている。

広場に続くメディーナにはありとあらゆる店がありそうだ。ぶらぶら歩きするだけでも胸がときめき楽しい。店を覗いていて日本では見かけないハーブの店を見つけた。モロッコではどこでもいつでも飲めるミントティーに入れる香りの高いミントの葉を商っている店だ。最初目にした時には店先に草を山積みしているだけでここは何を商っているのか全く判らなかった。

広場には大きな笠をかぶり赤い目立つ独特の衣装をまとった“水売り”がいて人々の目を引くが、うっかりカメラを向けようものならしつこくモデル料をせがまれ閉口する。蛇使い、軽業師、占い師、似顔絵描き等様々が喧噪の中でうごめいている。

新市街には緑が眩しいゴルフ場がいくつかある。一角にマジョレル庭園があって一見の価値がある。旧市街の喧騒を離れて庭園を散策すると正直ほっとする。

マラケシュのメディーナの家々は日干し煉瓦作りであるが、朝日夕日に赤く染まり幻想的だ。

モロッコには青い町シャウエンがある。山の斜面の小さな町であるがなぜか日本人に人気が高い。世界には町全体の色が統一されているところがある。

スペインのミハスの町はすべての建物が真っ白だ。カサブランカはスペイン語で白い家という意味のとおり町の基調

は白い、ローマは茶色を基調としている。隣国チュニスのシディブサイドは町中の建物が真っ白でドアと窓枠だけを真っ青に塗ってあり強烈な印象を受ける。アドリア海のクロアチアのドブロクニクは、全ての家の屋根がオレンジ色に輝き山の中腹から眺める風景は息を飲むほど美しい。マルタ島の首都バレッタはハニー色の街だ。



マジョレル庭園



つわものどもが夢の跡 古代ローマ遺跡“ヴォルピリス”

モロッコにオリーブ油とワインの製法を伝えたローマ時代の遺跡はヴォルピリスだ。砂埃をかぶった古代ローマ時代の家の床のモザイクに案内人が水を掛けた。すると絵が蘇り驚くほど鮮やかに色彩が浮き上がって見えた。

避暑地として名高い高原都市イフレンはモロッコの軽井沢だ。ヨーロッパからの避暑客が多いのだろう。家も町並みも欧風だ。公園に石造りの大きなライオン像がありモロッコの人たちがこぞってこの前で記念撮影をしている。嘘か真か判らぬがこのライオン像はモロッコに生息していた最後のライオンがモデルだそうだ。

都市観光もそれぞれ歴史と特色を持っていて興味深いが、モロッコの観光資源は山とある。“南の島に雪が降る”といった古い日本映画があったが、モロッコの冬はアトラス山脈を真っ白にするほど大量の降雪があって欧州からスキーを楽しむ人がやってくるそうだ。

日干し煉瓦の家の連なる街道をカスバ街道と称しこの道をバスが進む。真っ青な空の下、渴いた大地を進んでいる時に突然バスの車内に「カスバの女」の物悲しいメロディーが流された。一瞬賑やかなおしゃべりが止んだ。曲が終わると期せずして大きな拍手が起こった。メロディーが人の心をこんなにゆさぶるものかと思った。

アイト・ベン・ハッドゥは要塞化された村なので「クサル」と呼ばれている。小山全体が日干し煉瓦の城壁に囲われ物見の高い塔がいくつも村を取りまいている。クサルの中は迷路のようで複雑である。ここには今でも数家族が暮らしているが頂まで誰もが登れる。

ここはアラビアのロレンス等いくつもの名画が撮影された舞台である。

アトラス山脈の目のくらむような険しい道路を走っている時は、外人部隊の兵士たちはどんな心地でここを越えていったのか兵士の気持ちを思いやるといささか感傷的になる。

砂漠の入り口にある小さな村では化石を加工している。古代の生物の化石が埋まっている



”外人部隊“が超えていった急峻な山肌の道路

見事なテーブル、土産にと手に取った小物は手ごろな値段でいくつか購入した。無理にでも買わせようとする他国で味わった不快の思いもなく気持ちのいい店であった。そういえばモロッコの店は客に強引に売りつけるような売り方をする店にはこれまで出会わなかった。

街道筋には道路に絨毯を広げ、古い刀剣などの骨董品の数々を商っている露天商がいる。手に取ってみたいがいつも時間がなく後ろ髪をひかれる思いで眺めてきたものである。

時間に余裕があればモロッコの南部地方のアルガンの木の生育するエッサウィラやタルーダントを訪ねてみたい。カサブランカやタンジェの人たちと比べると何となくゆったりしているように感じた。

頭に青いターバンを巻いた人、眼以外は全身黒づくめの女性、ゆったりした民族衣装を着こなす年配の女性たち、民族衣装ジュラバをまとった紳士、Tシャツの若者たち、人々の行きかうさまを眺めながらなんとなくゆったりした国なのだろうかと思った。ふと此の感覚はなんだろうと考えた。それは歩くスピードだと気が付いた。この国の人たちは何事にも急がない。急ぎ足で巡る日本人の観光はモロッコの人達の目にどう映っているのだろうか。